

問われるのは筆者の視点

オッペンハイマーの三冊の伝記

真の「偉人」とは、どういう存在か？

実は、「偉人」と呼ばれるのがふさわしくない、そういう人こそ、本物なのではないか。

「原爆の父」といわれるロバート・オッペンハイマーの複雑な人生。

三冊の伝記を池内了さんが読み解く。

総合研究大学院大学名誉教授

池内 了

●いけうち・さとる 1944年兵庫県生まれ。専門は宇宙物理学、科学・技術・社会論。近著に『科学の限界』（ちくま新書）、『現代科学の歩きかた』（河出書房新社）、『宇宙論と神』（集英社新書）、『科学・技術と現代社会』（みすず書房）など。

偉人？

私は「偉人」という言葉が嫌いである。

「偉人」とは、「偉大な人、優れた人、大人物」のことのようにだが、どんな人間にも欠陥があり、いやな面もあるだろう。

しかし、それには触れず、素晴らし

しい業績とか歴史に残る偉業を成し遂げたことで「偉人」と称し、その仕事を持ち上げるだけでなく人格までもが高潔だとして褒めあげることには違和感を持つからだ。

特に科学者は、科学の分野において優れた業績を挙げたといつて、他の分野（哲学や教育や倫理など）についても高い見識を持っている（いた）とは限らない。科学では優秀である

社会に対する見識の高さは別であり、

いくらノーベル賞をもらっていても、そのような科学者を「偉人」と呼ばないことにしている。

たとえば、ニュートンは何百年に一人の科学の天才だが、その狷介（けんけい）な人柄から「偉人」とは呼べないだろう。しかしながら、当時の政府はニュートンを造幣局長官として任命し、国会議員にまで遇したのでから、科学の業績がモノを言ったことにな。もつとも、人をあまり信用しないニュートンであればこそ鷹金づくりを摘発できたのだから、政府の人間には人を見る目があつたと言うべきかもしれないのだが……。

イギリスの科学者なら私はファラデーを高く買っている。彼は、科学の業績が超一流であるとともに、王立協会の会長になることを辞退して生涯一科学者として研究に没頭する

ことを選んだという。

ファラデーは自分の限界をよくわきまえていた謙虚な人間であつたことがよくわかる。ファラデーこそ「偉人」にふさわしい人物なのだが、むしろ「偉人」という何やら厳めしい雰囲気とは無縁であることに気づく。パラドックスなのだが、真の「偉人」とは「偉人」と呼ばれるのがふさわしくない、そういう存在なのではないかと思う。

ここで私がとり上げたい科学者の伝記はオッペンハイマーの伝記である。マンハッタン計画で原子爆弾の開発発を主導した人物で、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下の責任者と見做されているから、日本においては彼が「偉人」と呼ばれることはないだろう。

まさに、伝記の中身が問われることになる。

紆余曲折の人生

ことは確かだとしても、そこから一歩でも外れるとほとんど子供のような幼稚な意見しか持っていない科学者のほうが多いのである。

それにもかかわらず、科学の業績を鼻にかけて政府の要職に就きたがり、賢者のような顔をして知つたかぶりの知識を振り回し、いかにも深遠そうに当たり前のことを語りたがるのだ。だから私は、科学の才能と

オッペンハイマーは、富裕な家に生まれて闊達な青春時代を過ごし、物理学において優れた能力を発揮した後、共産主義に理解を示しつつ軍のために原爆開発の指揮をとり、戦後になってアカ狩りで公職を追われるという、紆余曲折の人生を歩んだ。それだけに、伝記作者が彼のどの部分に焦点を当て、何をクローズアップしたかによって、描かれたオッペンハイマーの人生の色も異なってくる。読み手の私も、当然オッペンハイマーについてある種の先入観を持っているから、その生き様について偏見に満ちた読後感になってしまう。むしろ私は、それこそがオッペンハイマーの伝記を読む真つ当な読み方ではないかと思っている。彼のよう